

「雨とプリンとあの人と」(広尾の掌編小説 1)

見上げた空は相変わらず雲であふれていた。

このところ、青空と太陽はシャイなのか、なかなか顔を見せてはくれない。灯ったばかりの東京タワーが、薄い雲にかかって淡く広尾の街を見下ろしていた。

雨模様でさえ画になる街を、私は広尾のほかには知らない。

紺色に白い花柄の傘を片手に、通りを歩いた。雨が弱いからか、街行く人の足どりはどこか雨さえも愉しんでいるかのようだった。街の雰囲気そうさせているのかもしれない。

まだ日は暮れていなかったが、街路灯や店の照明がつきはじめた。雨粒が光を反射してきらきらしていた。

カバンのなかで通知音が鳴った。

「帰り、すこし遅くなる。ごめんな、なるべく早く帰るよ」

スマートフォンに届くメッセージはいつもと同じだった。

あの人は今日も忙しいらしい。まったく、今日が何の日か、忘れちゃったのかしら。

大事な人の誕生日くらい、帰りも一緒が良いわ、なんて思いついて
職場近くまで来たのに。やっぱり帰りは遅くなってしまうのね。

驚かせようと思って、広尾まで来ていることは連絡していなかつ
たのが悔やまれた。

ちょっぴり腹立たしくも寂しくもあったが、仕事だもの、仕方がな
いわ、と自分に言い聞かせた。

どちらにせよ、あの人のために用意したいものが、広尾じゃないと
手に入らない。

商店街を目的の店まで歩いていく。

目当ての看板を見つけ、足を止めた。



パティスリーMERCYだ。ここの「広尾プリン」を一本買ったかった。

プリン好きのあの人が、わたしの誕生日プレゼントとして贈ってくれたものだった。プリンには夢がつまっている、というわたしの言葉を覚えていて、とびっきりのプリンを用意してくれたのだった。

すこし硬めではあるけれど口どけなめらかで、甘ったるくはないのにしっとりとした甘さが美味だった。

幸せの味がした。

今度はわたしがその幸せの味を贈りたいと思って店を訪れた。

喜んでくれる顔がはやく見たい、と思いながらプリンを選んだ。

どんなふうに喜ぶだろう、と想像してみる。あの人は美味しいものを食べるときに、少年のようにくしゃっと笑う。瞳を生き生きとさせて、見ているこちらの心まで満たされた。

店から出て駅へと歩きながら、もう帰ろうかどうしようか考えた。

外は暗くなっていた。雨はだいぶ弱くなってきていた。

せっかくここまで来たのだから、すこし遅くなってもあの人を待

とうかしら。

どこかのお店で待つことにしようか、と思っていると、見慣れた姿が花屋から出てきた。

「あれ、仕事、もう終わったの？」

愛しい人にかけてよって笑った。

わたしがいるとは考えもしなかったようで、迎えに来てくれたの？ と目をみはって彼は言う。

「なんだ、僕も早く帰って驚かそうと思ったのに」

と苦笑いして彼が花束を差しだした。

「誕生日って、祝われる日でもあるけど、自分が感謝を伝える日でもあると思うからさ」

照れくさそうな表情を浮かべながら話す彼の目は真っ直ぐだった。

雨はいつのまにか上がっていた。

傘を閉じて、空いた手は彼と絡んだ。

完

作 天風凜（あまかぜ・りん）